

ハイドンの交響曲

—— 時代的推移による考察 I ——

中村美保子・藤田まゆみ

Symphonies of Haydn

——A Study from the Point of a Change of Times I ——

by

Mihoko NAKAMURA and Mayumi FUJITA

はじめに

今日、数多く交響曲の演奏会が開かれているなかで、最も多いのは古典派の作品である。しかしながら、長い生涯を送り、多くの作品を残しているにもかかわらず、ハイドンの交響曲が演奏されるのはせいぜい20曲ぐらいのものである。それもモーツァルトやベートヴェンに比べればまれにしかない。だが、これをもってハイドンの業績を過少評価してはならない。彼は交響曲の発達に最も力を尽くしたので、もしもハイドンをもって音楽史が終わったとしたら、彼は最も偉大な作曲家の一人であったことに間違いはないであろう。したがって、ここではハイドンの交響曲について取り上げてみる。

I 生涯

1732年3月31日ハンガリーの国境近くのローラウに生まれ、1809年5月31日ウィーンで没した。ハイドンの家系は純粋なドイツ人の血統で、身分も低く、また経済的にも豊かではなかった両親の12人の子供の第2子として生まれた。幼いころから、父の義弟ヨハン・フランクに引きとられて音楽教育を受け、1740年からはウィーンのシュテファン教会の合唱児童となったが、ここでの音楽教育は決して正規のものではなかった。しかし、声変わりのため1749年11月にはこの児童合唱隊を罷免され、一時は町を流し歩くセレナード楽団に加わったりするほどの苦境に立った。幸いにも当時のオペラ流行作曲家であったニコロ・ポルポラと知りあったことから、上流社会への道が開かれ、1755年にはフュールンベルク伯爵家にヴァイオリン奏者として招かれ、ここで弦楽四重奏曲12曲を作曲したことにより、作曲家として出発した。ついで1759年にはボヘミアのルカウェックの伯爵マキシミアン・フォル・モルツィンの楽長となることができた。彼はこのウィーンの皇帝侍従兼枢密顧問官の「作曲家兼指揮者」となったのである。楽長としての任務を遂行するかたわら、早速2曲の交響曲を試作した。そして1761年この楽団の解散を機に、その後30年間すごすこととなったエステルハージ公爵家に副指揮者として迎えられ、1766年楽長ウエルナーの死後は正楽長となり、交響曲、室内楽、歌劇などを次々に作曲した。その作品もヨーロッパの主要都市で出版されて、名声も徐々に高まっていった。1790年ニコラス・エステルハージ公が亡くなり、楽団は解散され、彼は名誉楽長という肩書きと年金をもらって、事実上自由の身になり、ウィーンに初めて独立した作曲家として住むよう

になった。ウィーンに住むようになってから、モーツァルトとの友情が生まれ、1791年、94年の2度にわたってロンドンへ演奏旅行に出た。このロンドン旅行の結果、93番から104番に至る12曲のいわゆる《Salomon》交響曲というハイドン最大の収穫が生まれたのであった。ウィーンに戻ったハイドンはシューヴェーテンの訳編歌詞によるオラトリオ《Die Schöpfung》を作曲して、いよいよその名声を高めた。このオラトリオの成功は、さらに1798年から1801年にかけて、最後の力を《Die Jahreszeiten》の完成に注いだ。その後もいくらかの作曲はしたが、1803年から取りかかった作品103の弦楽四重奏曲の最初の2楽章を完成しただけで、1806年以来創作の筆を絶った。このころから健康は急速に衰え、1808年3月ウィーン大学での《Die Schöpfung》上演にひじかけいすで運ばれて出席、1809年5月26日、ピアノに向かって自作の《Kaiserhymne》を弾いた5日後、76歳でこの世を去った。

Ⅱ 創作様式

1 時代的背景

ハイドンは、クラシック音楽に貢献した第一人者で、大作曲家といわれるなかでは、かなり長命の方であった。生存中には、モーツァルトの生涯が含まれているし、彼が死去した時には、ベートーヴェンはすでに39歳で、第6交響曲まで完成していた。

一方、文化史的に見ると、モンテスキューの「法の精神」、ルソーの「人間不平等起源論」、
「民約論」、アダム・スミスの「国富論」などが出され、また大英博物館、ベルリン大学も設立された。この間、フリードリッヒ大王の即位、パリ条約、アメリカ独立戦争、フランス大革命など国際情勢も目まぐるしく変化した。このように表面的にながめただけでも、ハイドンの生存時代は、急速に近代化の歩みをみせていたといえる。

だいたいハイドンの時代は、市民階級の興隆の時代であった。市民階級は貴族や大司教など金持ちに従属していた時代から、自分で働き商工業を支配するようになった。彼らは生活に自信と個人の自覚を持つようになった。そして個人の尊厳、個性の尊重が生まれた。

したがってこうしたことからだけ見ても、ハイドンの長い創作時代がいろいろな様相を帯びてくるのも不思議ではなく、晩年に自由人として生活し、モーツァルトもベートーヴェンも貴族や大司教からのがれようとしたのも全く当然のことといえる。

2 創作様式の区分

ハイドンが作曲を始めたのが1750年ごろで、作曲から遠ざかり始めたのが1803年ごろである。これをハイドンの外面的生活から分けるとだいたい次のようになる。ウィーン時代1750～1759年 アイゼンシュタットおよびエステルハージ時代 1760～1790年 晩年ロンドン時代 1791～1795年 晩年ウィーン時代 1796年以降 この中で第2期に当たる時代は30年にもわたっているが、それだけに多くの問題も含まれている。これに対して、1759年以前のウィーン時代は、青年時代で、創作様式上からもそのまま第1期と見なすことができる。また1791年以降も文字通り晩年で、創作様式的に完成期ともいえる。ところが、1760年から90年に至る時期は、創作様式の発展にとっても最も重要な時期で、ひとまとめにして扱うことはできない。そこでハイドンの創作様式の区分をどうすればよいか問題となるが、それには次のような8つの区分が最も妥当ではないかと考えられる。

第1期 1750年ごろ～1760年ごろ

第2期 1760年ごろ～1765年ごろ

- 第3期 1766年ごろ～1772年
- 第4期 1773年 ～1778年ごろ
- 第5期 1779年ごろ～1784年ごろ
- 第6期 1784年ごろ～1790年ごろ
- 第7期 1791年ごろ～1795年ごろ
- 第8期 1795年以降

もちろんこれらの各期の間には、短い過渡期があることはいうまでもない。

第1期 ポヘミアのモルツィン伯爵家の楽長になった時代までは、ハイドンの創作的には最も不明なものが多い時期である。彼はマンハイム派から影響を受け、その力性の変化法、ワルツの様式、和声法を用いた。またイタリアの音楽からも学び、それ以上にオーストリア、特にウィーンの前輩たちの作品からいろいろと教えられていることは否定できない。試作的な交響曲においても、マンハイム派以上にウィーンのヴァーゲンザイルやモンからの影響の方が強い。しかし弦楽四重奏を除くと、現在の音楽生活において重要な役をする作品を書いていないが、彼は意欲的に作曲を続けた。その態度を一言にしていえば、ハイドンに提示された当時のあらゆる形式を求めて書き続けたといってもよい。

第2期 1765年ごろまでにおよぶ第2期は、ハイドンがアントン・エステルハージ公の副楽長になった時から始まる。彼はこの時期に至って、個性の自覚を見せ、作品に個性を盛ることに努めるようになった。1762年にアントン公が死去し、弟のニコラスがそのあとをついだ。このニコラスが素人離れしたバリトン（チェロの先祖）の名手だったので、この楽器のための協奏曲も生まれ、楽団を指揮するようになった上に、この楽団がかなり立派なものであったため、交響曲も次々と書かれるようになった。現在でも盛んに演奏される交響曲 D dur ≪Hornsignal≫は、この時期の終わりごろの作品である。

ハイドンは交響曲にしても、室内楽にしても、クラシック音楽家らしく、この時期には典型的なものへ向かうとした。そして室内楽の方では、特に四重奏曲でほとんどその方向は決まったが、交響曲ではまだ研究中であったといえることができる。

第2期の終わりごろ、1765年に作曲された ≪Hornsignal≫ は、アイゼンシュタットにおける初期の作である。冒頭に4本のホルンが信号ラッパのような主題を奏するところからこのように言われるが、別名 ≪Auf dem Anstand≫とも呼ばれている。

第1楽章 Allegro D dur 4分の3拍子 ソナタ形式

この交響曲には序奏がなく、いきなり4本のホルンの勇壮なファンファーレ（楽譜1）に始



る。楽器編成も小規模だが、形式の構成も簡略である。

第2楽章 Adagio G dur 8分の6拍子

ヴァイオリンの奏する主題（楽譜3）によって開始し、最初は弦のピチカートで伴奏される



Allegro assai

楽譜 5 

楽譜 6 

す方法をとった。こうした傾向は、計画的に構成するという後の交響曲の1つの特徴の芽ばえとも考えられる。この提示部が2度くり返された後、この2つの主題の要素をもとにした簡潔な展開がなされ、展開部を終える直前に全く新しい D dur の旋律（楽譜7）が現われる。こ

楽譜 7 

れは非常にリリックな旋律で、後の古典ソナタ形式の第2主題の性格を明示している。次に再現部が原調で始まり、展開部も再現部も反復されて第1楽章は終わる。

第2楽章 Adagio A dur 8分の3拍子

ソナタ形式をとっているが叙情的な楽章で、弦楽合奏が主となっている。まず第1、第2ヴァイオリンが静かな第1主題（楽譜8）を提示し、次に経過部にはいり、第1主題の要素を発展させた第2主題（楽譜9）をヴァイオリンが奏する。全体の構成は提示部の後、平面的な展開部から再現部へと続く。

楽譜 8 

楽譜 9 

第3楽章 Menuetto, Allegretto Fis dur 4分の3拍子

典型的なメヌエットの形式をとっており、冒頭12小節の主題（楽譜10）は2度くり返され、

楽譜 10 

後半部も2度反復されトリオにはいる。ここではホルンの2部の動きが印象的であり、Fis dur と fis moll の交替は巧妙で一瞬シェーベルトを思わせる。

第4楽章 Presto fis moll 2分の2拍子

ソナタ形式で書かれているが、コーダにはいる前までは、ハイドンの典型的なフィナーレ調で明るい。ヴァイオリンの第1主題（楽譜11）で始まり、第2主題（楽譜12）がファゴット、

楽譜 11 


楽譜 12 

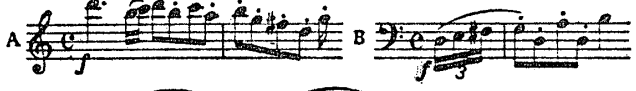
チェロ、コントラバスで現われるが、これは第1主題の変形といった主題である。コーダまでは非常にいきいきとしたものとなっているが、コーダは次第に楽器も少なくなっていく、最後にヴァイオリンだけが寂しく演奏を続け、消え入るように終わる。

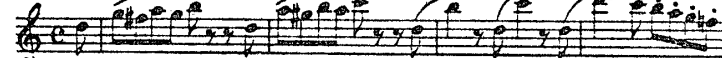
第4期 緊張の後には弛緩がくる。これは自然法則である。ハイドンの第4期も第3期の後にあって、この自然法則に従った。この第4期は1773年ごろから1778年ごろまでであり、外面的には少なくともハイドンの生活には、たいした変化が現われていないが、作品には前の第3期とは違った様相が出ている。ハイドンはこの時期では、器楽よりも声楽曲、特に歌劇にとりつかれていたようで、この時期の面目はむしろこうした方面にあるといっても過言ではない。歌劇では、性格の強調を意図し深いつつこみで音楽を書き、15年後にモーツァルトが完成したクラシックの性格歌劇を早くも提示した。その音楽は他の分野と比べると、実に大胆なものを見せ、特殊な打楽器を加えたり、東洋風なリズムを置いたりして器楽曲にない新鮮味を見せ、交響曲では安定性が現われてきた。ハイドンは個性の強化よりも、形式的な充実と統一、全体の均斉のとれた完成へと進み、ロマン化への傾向をここで放棄した。ここで形式を充実させた例として、《Maria Theresia》を取り上げてみる。

第1楽章 Allegro C dur 4分の4拍子

いかにもマリア・テレジアの臨席にふさわしい、管弦楽の壮麗な第1主題（楽譜13）で開始され、経過部にはいり、ヴァイオリンとチェロの経過動機（楽譜14A・B）が立体的に展開さ

楽譜13 

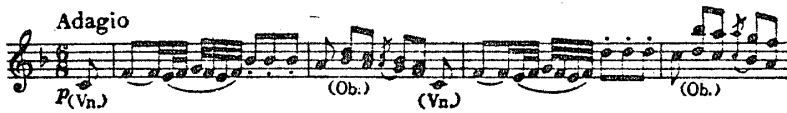
楽譜14 

楽譜15 

れる。第2主題（楽譜15）は第1ヴァイオリンで奏されるが、臨時音のために調性が浮動する。展開部は経過動機になり大きく展開し、再現部へと続く。

第2楽章 Adagio F dur 8分の6拍子

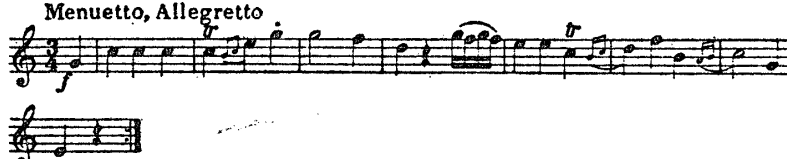
これは単主題による大きな歌謡2部形式の楽章で、主題（楽譜16）をゆったりとした8分の

楽譜16 

6拍子のリズムにのせてヴァイオリンが奏する。全体としては、単純だがなかなか巧みに作られた緩徐楽章である。

第3楽章 Menuetto, Allegretto C dur 4分の3拍子

メヌエットは楽譜17のようにfで始まり、第2部の終結部分に、のちの軍隊交響曲の Alle-

楽譜17 

gretto を特徴づけているトランペットの三連信号音が、管楽器の斉唱で出てくる。そしてトリオは c moll である。

第4楽章 Finale, Allegro C dur 2分の2拍子

このフィナーレは、のちにハイドンが交響曲の終楽章として、最も愛好する二部ソナタ形式を用いた最初の例である。第1部つまり提示部は、単純な第1主題（楽譜18）に始まり、ついで出てくる属調の第2主題（楽譜19）は第5度の持続音上に、クロマティックに反行するオー

楽譜18



楽譜19

ボエとヴァイオリンの2声から成っている。第2部つまり展開部、再現部は13小節の第2主題の展開が示され、原調で第1主題が再帰される。次に主題動機の発展による経過部があり、また第1主題が再帰されるが、これは再現部の機能はなく、経過としての主題の再現・展開である。そして原調の第2主題のあとコーダが続く。

このあと5期からがハイドンの全盛時代になるのであるが、それは次の機会に報告させていただく。

引用・参考文献

- 1) 名曲解説全集 I : 1962, 音楽之友社
- 2) 岩見至訳 : 1971, ハイドン (ヴィニャル著) 音楽之友社
- 3) 大岡昇平訳 : 1965, ハイドン (スタンダール著) 音楽之友社
- 4) 前田昭雄訳 : 1963, ハイドン (バルポー著) 白水社
- 5) アインシュタイン : 1972, 音楽史 ダヴィッド社
- 6) 門馬直衛 : 1963, 西洋音楽史要 春秋社